

観天 望気

「ないない尽くし」の転換

一九七〇年代は、全国で過疎地域の出現が相次いだ。只見川流域の山深い奥会津の町村には、軒並み過疎が進行した。

その流域に位置する山間の三島町も、七一年に過疎町村に指定された。この三島町は「誘客に向けての町づくりを自分たちの手で」を合言葉に、七二年に観光土産品コンクール、七三年に雪と火のまつり、七四年にふるさと運動など、矢継ぎ早に「自分たちができる町づくり」に取り組んでいた。

工業意匠(インダストリアル・デザイン)の学科に籍をおいていた私は、生活者の思いを知らずしてモノやコトの設計はできないと考え、夏休みを利用して、「野に出て生活を学ぶ」授業を開設していた。その一環で、七八年に学生約三〇人とともに三島町を訪れた。一〇日ほどの滞在の中で、私たちは、謙遜してか「山しかない何もないところ」と語るこの地の多くの人の声や耳にした。町おこしに取り組みつつも、「山があることの誇り」を人びとから感じられなかった。都市との比較の中で生起するこの「ないない尽くし」の観念は、授業を終えてからも個々の家々を巡り語り合い、交流を深める中で、徐々に変わっていった。厳しさが四季の移ろいが美しい豊かな自然、人情が厚い町など、「ありあり尽くし」の観念が語られるようになった。

プラスチック文化が山村をも折檻する勢いであったが、この地の家々には自然素材を採取して生活用具を手づくりする暮らしが、息絶え絶えとはいえ残っていた。初めは「こんな恥ずかしいものを」と自らつくったものを背の後ろに隠してしまつた方々が、徐々に「こんなものつくってみたのですが」と私が訪れるたびにを見せてくださるようになった。観念の転換には、時間が必要である。そして八一年、「三島町生活工芸運動」が生まれた。

「晩酌一本ぐらいになるかね」などと言いながらも始められた「山間に生きる歓びを表現する手づくりの生活工芸文化」は、今、この地の高齢者たちが主人公になって展開されている。それは、天人合一の今日的暮らしであり、高齢者たちの生きがいとして、しっかりと三島町に定着している。

千葉大学 名誉教授

宮崎 清

みやざき きよし

1943年山梨県生まれ。千葉大学工学部教授・工学部長、千葉大学評議員・理事・副学長、放送大学特任教授などを歴任。アジアデザイン文化学会総会長。地域資源に基づく地域づくり、伝統的工芸品産業の振興などを実践。主な著書に、「デザイン事典」(朝倉書店)、『藁』I・II(ものど人間の文化史・法政大学出版)、『図説・藁の文化』(法政大学出版)ほか多数。



農園の蕾に霜が降りて
まるで砂糖菓子のように。
ブルーベリーに出会って、
運命をともにしようって、
心に決めました。

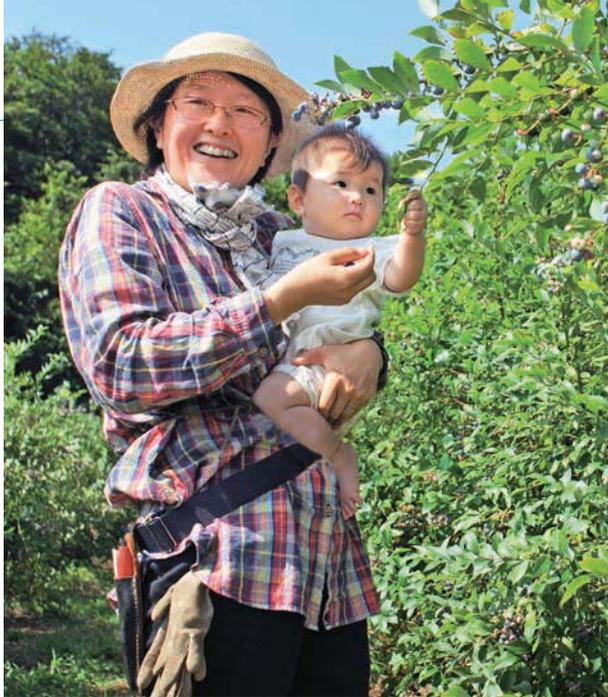
農と食
の邂逅

野村 加奈子 さん

京都府京丹後市
ファームガーデン空詩士代表

食べ物をつくる仕事がしたい。農業とは無縁の
家に育ち、農業を学ぶために北海道の学校へ、
農家に研修へ。新規就農してブルーベリー栽
培を始める。企業的大規模農業が潮流の中で、
ファミリーファームが発信するもう一つの農業。





P19: 姪の菜々美ちゃん(6歳)に摘み方を教える加奈子さん。「子どもの背丈でも取れる完熟の実を教えてあげます」 P20: 8カ月の長女、真央ちゃんにはお兄さんが二人(洋人君5歳、駿太君2歳)いる(左) 摘み取りは7~8月。入園料は取らず、摘んだ分だけ小パック(500円)か、大パック(1,000円)に入れて販売(右上) 母、富美栄さんは畑仕事に、育児にと協力してくれる(右下2枚)

未知の世界にひかれて

山を切り開いて造成した国営農地の一角に、ブルーベリーがたわわに実る「ファームガーデン空詩土」がある。摘み取りに来たお客さんが一服できるように、父の照郎さん(六八歳)がつくってくれた休憩スペースで、野村加奈子さん(三七歳)は笑顔で出迎えてくれた。心地よい風がそよぐ。

ブルーベリーを植えたのは二〇〇三年。地元で本格的に生産している農家はいなかった。両親も農家ではない。行政の方に就農を相談した折、「一本からどれほど収穫できるかも、売れるかどうかも分からない。就農計画が立てられないね」と言われた。「そんな未知なところにひかれたんです」

少女時代からハーブなどの園芸好き。「自然豊かな北海道で学びたい」と、東京農業大学オホーツクキャンパス(網走市)に入学。ハーブとは異なるジャガイモやビートを学ぶことになったが、「生きていく基本ですし、食べ物もいいなって」。研修を受けた先の農家がイキイキと仕事と向き合う姿に触れ、その思いは募っていった。小樽市で出会ったブルーベリーを栽培する農家の方に、「これは女性でもできるし、加工もできる」と言われた時から、ブルーベリーと運命を共にしたいと思った。

卒業後は地元に戻り、農業公園での三年間の勤務を経て、夢の実現に向かっていくことにした。農家ではない加奈子さんは農

地取得もままならなかったが、両親が「老後の楽しみに」と、小さな畑を借りていた。そこで知り合った農家が「肌脱いでくれ、農地を借りることができた。両親も「苦勞をするかもしれないけど、人間相手より自然相手の方がええかも」と賛成してくれ、ついに一歩を踏み出した。

苗を植えてから三年は木を育てるばかりで、実を収穫できなかったが、この間に生産、販売の方向性をつかんだ。「収穫時期が限られるから、長く売るには加工が必要。JAにも出荷できないので、売るのは直販」と決めた。いつからでも加工が始められるようにと、実家の近くに工房を建てた。「全ての親の協力があったること」と、加奈子さんは照れる。

家族で働く喜び実感

三年がたち、ようやく収穫できるようになった。加奈子さんは、みずから配達できる距離にあるケーキ屋を五、六軒見つけ、手書きの名刺を持って飛び込み営業に回った。「よければ使ってもらえませんか。スーパージョーにも置いてもらえませんか。売れた分だけ引き取っていただければ」と、これまで飛び込み営業。なんと全ての店舗で使ってくれることになった。「怖いもの知らずなんですよ。当たって砕けろっていうか(笑)」

樹上で完熟させたブルーベリー、農薬を一切使わない栽培、そして何より加奈子さんのひたむきさに、いずれの店主も魔法に

掛かってしまうのだろう。純真で真つすくな人柄は、周りを動かす力を持っている。一・三畝の畑に二〇以上の品種が植わっている。収穫量は一ト弱。二割を生食用で販売し、八割をジャムなどに加工している。

そんな加奈子さんには力強い助っ人がいる。両親と姉の田中里佳子さん(三九歳)だ。



「人間ができることはほんのわずか。全てお天道様と自然のおかげ」と加奈子さん。春と秋に有機質肥料をたっぷり与え、土づくりをする

皆で協力して作業に当たる。母の富美栄さん(六五歳)は、加奈子さんの三人の幼子の面倒も見てくれる。里佳子さんがつくるシフォンケーキは地元の直売所でも評判だ。「何でも家族で一緒にやっています。お互いに融通が利くところがいい。自分のペースで仕事ができありがたい」と、家族で仕事

ができる喜びを表現する。「空詩土」という名前も家族で相談して決めたそうだ。「ソラシド」つて上がり調子でいいよねって(笑)トマトとコメをつくる農家の野村拓生さん(三七歳)と、三〇歳で結婚し、三人の子供にも恵まれた。もう一つ恵まれていることは加奈子さんがやってきたブルーベリー栽培をそのまま続けられていること。拓生さんはトマトとコメ、加奈子さんはブルーベリーと、結婚前の農業をそのまま継続している。両方の両親が協力してくれていまず」とニコリする加奈子さんだ。

地元とのふれあいが励み

五年前から、希望する地元のお客さんに、畑に来て摘み取りをしてもらっている。長男の出産時に畑に出られなかったことがきっかけだ。「子育てもあるし」今後、自分たちで全部摘むのは大変だね」という話から、摘み取りをしてもらうことにした。「遠くに出荷することも考えましたが、送料などが上乗せされて割高になってしまふ。それなら地元の人に来てもらって摘み取ってもらうほうが……」と、市の広報誌などに載せてもらい、PRしている。

おかげでシーズン中は平日もほぼ毎日予約が入る。「この前、来た時に摘んだものは全部お裾分けしてしまったから、今日は自分の分を摘みに来た」と言いながら、再訪してくれるお客さんも多いという。地元の保育所の子どもたちも招く。「背丈の低い子ども

もにすれば、ブルーベリーの木の中はジャングル。トトロの森に行こうねと、案内するんですよ」と、加奈子さん。地元の人とのこうしたふれあいが最大の励みになるそうだ。

収穫時期が終わっても、土づくりや剪定の作業が続く。何の作業がいちばん好きかと聞くと、「草を取っている時」と、意外な答え。刈り払い機で取りきれない樹の根元周りの草を手で取っていると「あ、この土はフカフカやな」ここはテッポウムシに食われたな」と、日々発見がある。「雑草も大事。雑草の上にとまった夜露が、畑の水分保持の役割を果たしてくれる」

その表情から、自然にゆだねながら、家族で小さな紫色の実を育てる農業に、心から満足している様子が伝わる。他の果樹と違い無農薬栽培がしやすく、摘んでそのまま食べるタイプの果実なので、今後も無農薬栽培にこだわっていくつもりだ。

早朝のブルーベリー畑は最高だという。「クモの巣が朝露を受けて輝いて見えてすてきです。それから実も葉も全部落ちた寒い時もいい。ブルーベリーの蕾に霜が降りて、まるで砂糖菓子のように」と話は尽きない。空詩土を訪れる人が絶えないのは、ブルーベリーの甘酸っぱさとともに、加奈子さんが発する、まるで詩のような一言一言に引き込まれるからだろう。農の世界に、ふわっといざなってくれる不思議な魅力を持っている。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

放射性セシウムの量を正しく測る

(独)農業・食品産業技術総合研究機構
食品総合研究所 放射性物質影響研究コーディネーター

濱松 潮香

目に見えないものを数値にすることで、人はそれが多いか少ないかの判断ができるようになります。東京電力福島第一原子力発電所事故(以下、原発事故)による放射性セシウムの環境への放出により、東日本だけでなく日本国内でたくさんの人たちがその量を測定しています。

一番身近な例では、私たちが食べる一般的な食品において、食品衛生法によって定められた基準値一キログラム当たり一〇〇ベクレルで、それらの食品の流通が規制されています。この基準値を境に、農産物や食品は数値が高いものは廃棄、下回ればそのまま流通されます。日本の総人口は一億二七二三万人(総務省、二〇一四年一月一日確定値)であり、毎日一人当たり約二キログラムの食品を食べているので、単純に掛け合わせるのと、一日に食べられている総食品量は約二五万トとなり、国産のもの全てを検査しているわけではありませんが、輸入品検査や水道水、飼料、土壌、がれきなどの廃棄物も検査対象となっていることから、毎日莫大な数の放射性セシウムに関する検査が行われていることが想像できます。

それでは、この一キログラム当たり一〇〇ベクレルという基準値は、どこでも正しく測定されているのでしょうか。今回の原発事故の

前から原子力発電所などの近くでは、平常時の環境に異常がないか、放射性セシウムの量を測定していました。事故後は測定する範囲が拡大され、そのための人手だけでなく、検査する機関や測定機器の種類も一気に増えました。

そこで、食品総合研究所と(独)産業技術総合研究所は共同で、放射性セシウム測定用の認証標準物質を開発しました。はかりの分銅のように、これを誰がどこで



放射性セシウム測定用の認証標準物質とゲルマニウム半導体検出器

どんな機器で測定しても、基準値として示した放射性セシウム濃度の範囲であれば、自分が正しく測定できているということが分かります。また、定期的にこれを測ることで、測定機器の精度が上がり、測定機器の管理が容易になります。

このように、認証標準物質は急速に増えた放射性セシウム測定を行う人たちにとって、測定値(数値)に信頼を与えるという重要な役割を果たします。

原発事故から三年以上が経過し、多くの農産物・食品で検出される放射性セシウムの量は少なくなってきました。より低い数値を測る努力が続けられています。そうした中で、検査結果の数値への信頼は、国産の農産物・食品の信頼につながり、被災した地域の復旧と復興に役立っています。

F



Profile

はまつしおか
埼玉大学大学院理工学研究科博士課程単位取得後、退学。学術博士。農林水産省へ入省し、四国農業試験場を経て、食品総合研究所へ。2012年から現職。現在の研究分野は、食品中の放射性セシウムの動態解析。このほか放射能分析用標準物質の利用拡大を推進中。

Forum Essay

フォーラムエッセイ

今年の新茶の時期、私はバックバック一つに茶器を詰め、全国で「JAPANESE TEA PARTY」を開催してまいりました。「JAPANESE TEA PARTY」は、雑貨屋さんや洋服売り場などに突如として現れ急須でお茶を振る舞うもの。だから、買い物に来る多くの人はその足を止め、「煎茶ですか？」と不思議そうに尋ねてきました。

かつて、私たちの生活の中には急須とお茶が当たり前のようがありました。しかし昨今は、食文化やライフスタイルの変化もあり、多くの人がペットボトルのお茶をバッグに入れて手軽に持ち運べる時代です。残念ながら急須で淹れるお茶は「日々の中に当たり前にあるもの」ではなくなってきました。

ネットやスマホは誰とでもすぐに自由につながる事ができます。でも、実際に「集い」「共有し」「同じ急須のお茶を味わうこと」とは同じ時間でも厚みと温かさが違うもの。

急須で淹れるお茶の味はその都度、一定ではないこともありすが、その揺らぎがいい。急ぐとおいしいお茶は入らないので、心をこめてゆっくり淹れることが大切なのもまたいい。お茶をつくった人の想いを知った上でそのお茶をいただく、お茶がまるで手紙のようでいい。茶器にこだわると、いつものお茶の時間がちょっと豊かになっていい。

しかし、そんなお茶の楽しさを普段急須で淹れるお茶と接点のない生活を送っている若い人を感じてもらうには、どうしたらいいのでしょうか。至るところから新しい情報がやってくる、速度の速い時代。「急須でお茶淹れましょう！」という言葉や想いだけで、今までと同じ形の発信をしても共鳴してもらうことはなかなか難しい。伝統や歴史を大切にしながらも煎茶を伝える方法、切り口を時代に合わせていかなければいけない時期が来ているのではないかと私は思っています。「JAPANESE TEA PARTY」もその取り組みの一つです。

煎茶が今までなかった場所と人のもとへ——。期待を超えるほどのインパクトで煎茶の楽しさを日本中に、世界中に伝えたいという想いが今、私の背中を押してくれています。



日本茶アーティスト
茂木 雅世

もき まさよ
煎茶道東阿部流師範、茶育指導士。「煎茶をちょっとおもしろく。なんだかワクワクっと」をテーマに、急須で淹れるお茶の楽しさを今までにはない形で提案している。ほっとするのにも楽しめる「JAPANESE TEA PARTY」を全国各地で開催。企業やクリエイターとのコラボも多い。

「JAPANESE TEA PARTY」



年寄りが元気なうちに何か行動を 仲間で始めた手探りの地域づくり

石川県鳳珠郡能登町

春蘭の里実行委員会 事務局長

多田 喜一郎

美しい春蘭再生が合言葉

春蘭の里がある宮地地区は、奥能登の中央に位置し、能登空港から車で約一〇分足らずの場所にある。奥能登の伝統的な建物である黒い瓦に白壁の家並みが多くみられ、石川県初の景観形成重点地域に認定されている。

過疎高齢化が進み限界集落ではあるが、地区には四七軒もの農家民宿群、廃校になった小学校を改修した「交流宿泊所コブシ」、山菜加工場の「夢づくり工房」があり、交流人口は年間延べ八五〇〇人になっている。

「二〇年後、私たちの集落はどうなってしまうのか。何とかできないのか」今のままでは集落が消滅する。お年寄りが元気なうちに、何か行動を起こそう。一九九〇年ごろから、危機意識を持つ仲間七人と共に話し合いを重ねていた。地域再生について、集落全体で取り組むべきか悩んだが、集落全体が合意に達するには時間もエ

ネルギーも必要なため、まずは七人で結果を残そうと取り組むことになった。そうすれば、住民もきつと参加してくれると考えた。

九六年、七人で「春蘭の里実行委員会」を立ち上げた。春蘭の里では、奥能登の山に自生する春蘭を、生命力の強さやその美しさから、地域づくりのシンボルとした。

私たちは、地域再生へ取り組む本気度を行政に示し、行政が応援したくなるような地域づくりを目指した。結果として、廃校になった小学校の交流宿泊施設としての再利用や、砂防ダム関連では親水公園の整備、きのこ山の整備など、多方面において行政の支援を受けている。今年は、小水力発電の設備を整えようと計画中である。

当初、農産物の販売で年間一億円の売り上げを目指したものの、うまくはいかず、「農産物を売るより、この場所で食べてもらおう」と私の自宅を改装し、九七年に民宿を開業した。

私の自宅は昔の家を復元したもので、一〇畳

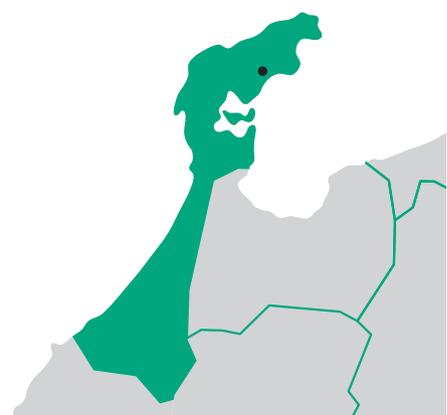
間四室、五右衛門風呂と岩風呂のほか、一三尺の広い廊下があり、縁側でゆつくりとくつろぐことのできる代表的な奥能登の民家だ。

いずれは、地域で手を組んで農家民宿を立ち上げ、修学旅行などの団体客を受け入れるようにすることを考えた。集落で育った子どもたちが都会からUターンしてきても、月四〇万円の収入を得られるようなシステムをつくり上げようとしたのだ。

そのため、私の自宅の民宿は、地域に農家民宿を増やすための土台づくりとして大切なものがあり、設備やサービスにお金を掛けるのではなく、「こだわり」を持つことで付加価値を付けようということになった。

一日一組だけの民宿に

まず、囲炉裏を囲んで人生談義や民話などを語り、縁側でゆつくりとくつろぐことで、お客さまと主人、女将が打ち解け合える雰囲気大切に



profile

多田 喜一郎

1948年生まれ。67年石川県立宇出津高等学校卒業。97年より春蘭の里実行委員会事務局長。能登町グリーンツーリズム推進協議会会長。石川県グリーンツーリズム研究会奥能登地域副会長。奥能登子供農山漁村交流プロジェクト受入協議会会長など務める。

春蘭の里実行委員

1996年、過疎高齢化が進む地域に危機意識を持った地域の異業種7名で「春蘭の里実行委員会」を結成。豊かな自然を最大限に生かした村づくり・村おこしを目的に、農家民宿や廃校を活用した交流宿泊施設、小型風力発電や親水公園などを住民主導で整備し、地元の自然と文化を生かしたグリーンツーリズム型観光をメインに農村を再生している。13年地域づくり総務大臣表彰など多数受賞。



上：コブシの体育館で行われる「入村式」
下：修学旅行の生徒と囲炉裏を囲む

にする。そのために、客は一日に一組しかとらないことにした。食事は地域の食材を使った郷土料理を中心に、輪島塗の器、御膳、手づくりの箸で提供する。酒器は、日本の伝統的な九段重ねの大盃だ。昔から家宝として持っていた輪島塗の膳と器は、祭りや結婚式などの家のめでたい行事に使うもの。つまり、お客さまをわが家の最高のお客さまとして、もてなそうという意思表示である。そして、田舎暮らしを体験してもらおうと、田植えや稲刈り、山菜採り、キノコ狩り、野菜収穫、魚つかみ獲り体験などを用意した。

二〇〇三年に過疎化、高齢化が進行している

中山間地域の農林漁家において、地域資源を活用したグリーンツーリズムへの取り組みを推進するため、石川グリーンツーリズム促進特区に認定され、民宿を開業しやすくなった。これにより農家民宿が四軒開業した。

廃校の小学校も活用

こうするうちに、地域では過疎化への危機感が高まり、行動しなければという住民が増え、農家民宿はその後も次々と開業。一三年には四七軒に増えた。

みである。多くの民宿は月収二〇万円程度のため、集客の向上は依然、今後の優先課題である。また、二〇〇六年には、廃校の宮地小学校が「宮地交流宿泊所コブシ」として再出発した。これで、宿泊者数二〇〇人を受け入れられる体制が整った。コブシは、宿泊施設として利用される以外に、住民による蓑笠などの民具の作成教室が開かれたり、地元で採れた山菜などを利用した加工品の試作が行われている。

体育館では、修学旅行や一般の団体旅行の入村式、離村式などを開催している。この離村式では、私は春蘭の里の評価が凝縮しているものと思っている。一〇室の個室は、冷暖房、バス、トイレ、冷蔵庫、台所付きの七畳間で、それぞれの部屋にオーナー制をひいている。

オーナーはNPO法人の会員が中心になって一部屋一人、または共同で管理している。オーナー料をコブシの運営費に充て、事務費や水道光熱費、周辺の草刈りなどに利用している。コブシの運営は、地元の高齢者の方々が健康な体を長く維持するために、協力して働いている。

当初の計画どおり、農家民宿やコブシでは、一般の方はもとより国内の修学旅行、研修旅行の団体を多く受け入れている。また、海外からのお客さまも急増しており、この七月ではイスラエル、タイ、韓国、中国、台湾から延べ八〇〇人以上の方が訪れている。

国内外を問わず、大勢の方が訪れるようになったのは、地域の元気な高齢者（農家民宿のおやじさん、おふくろさん）が言葉ではなく、もてなしの心で、お客さまの心をつかんでいるからと考えている。一夜という短い期間であるが、修学旅行の生徒たちは別れ際に惜別の涙を流してくれている。

また、インターンシップなど比較的長期間春蘭の里に滞在した若者は、里の皆と食事を共にし、仕事をする共同生活を送ることにより、挨拶がきちんとできるようになり、相手を思いやる心が養われるようである。学校側も春蘭の里に行けば、なぜこう人間が変わるのか、それを本にしたいという話もあるほどだ。

このように若者の心に変化が現れるのは、若者たちを迎えるおやじさん、おふくろさんみずからが多くの兄弟の中で育ち、また多くの子どもを育ててきたからこそ、子どもの気持ちになつて考え、接しているからなのだろう。地域の

元気な高齢者こそがまさに地域の資源だと思つた。

春蘭の里応援団が発足

二〇〇四年、農家の収入を上げ、地域を活性化させようと、地域の山菜、野菜などを加工する施設として夢づくり工房を設立した。現在、夢づくり工房でつくった山菜加工品や餅、みそ、梅干しなどを地域出身者に直販するシステムをつくるうとしている。

若い時は安くて腹いっぱい物が食べられる方がよかったけれど、年を取ると多くを食べられないから故郷の物を食べたい。安全な物を食べたいという話にヒントを得て取り組んだのだ。これらの商品はおふくろの味、おやじの味がし、故郷を思い出すと好評だ。

一二年、このような活動を応援しようと「春蘭の里金沢会」という応援団が、主に金沢市に出ている地域出身者により生まれた。

昨年はソバのオーナー制度をつくり会員を募集、そして収穫祭を開いてくれた。今年も、ソバやトウモロコシづくり、長らく開墾が途絶えていた盆踊りの復活などをしてくれた。地域から離れた人々も故郷を思い出し、少しずつだが帰ってきてくれるようになった。故郷を大事にする心がよみがえったのである。

「おらが故郷、実家に帰ろう、親の家に行こう、子どもに生まれた所を見せよう」。こんな故郷への思いは、やがて故郷の活性化へとつながっていく。故郷は心のすみではずっと生き続けているものだからである。現在、三人の若者がUターンして故郷に戻ってきてくれた。

この他にも、汪君^{ワン}という台湾出身の若者が二年間ほど春蘭の里にインターンシップに来て、三年目の二〇一〇年、春蘭の里に就職した。現在、地域の空き家を買取り、同じくインターンシップに来ていた台湾出身の女性と結婚して農家民宿を運営している。若者がこの地域を忘れないで、こうして戻ってきてくれるのは本当にありがたいものである。若者がこの里を思い出して、やがてこの地域に住み就職、また、農家民宿を開業する可能性がある。若者が地域にいれば何事もうまくは進まないと思う。

地域は宝でいっぱい

私たちは「農業の再生」と「農村の再生」は別物と考えている。さまざまな職種の人が集まって一つの地域をつくり得ることができると思っている。自分の仕事に責任を持ち、親の背中を子どもに見せることができる、そしてその子どもが地域で自信を持って働くことができる。

何もない田舎は本当に何もないのか。いや、見方を変えれば素晴らしい物がある。きれいな景色、川の流れ、ホタル、緑、紅葉、地元採れる山菜、野菜、キノコ、家で使わなくなった輪島塗の食器、手づくりの箸、そして何よりも大切な元気で魅力ある住民たちだ。

一八年前、行政に頼らずに七人が手探りで始めた地域づくりが、集落全体を巻き込んだ取り組みへと発展した。地域の魅力を再確認し、それを住民が理解する。そして、それを自分たちの子どもや春蘭を訪れた人々に伝えること。それが地域再生につながっている。

『農業直接支払いの概念と政策設計』

莊林 幹太郎・木村 伸吾 共著



(農林統計協会・2,800円 税抜)

直接支払い制度を包括的に整理

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

農業は過保護というのが、世間一般の認識だろう。なぜ、農業や農家を守らなければならないのか。国民の生存に不可欠な食料を生産しているから？ 競争力の弱い存在だから？ 仮に守るべきだとしても、どういう手法で守るのが公正であり、効果的なのだろうか。

どの先進諸国も農業保護策を講じている。その手法としては「直接支払い」が最も普遍的である。本書は、その「直接支払い」という農政手法を、日本に当てはめる場合、どのようなことに留意しなければならないのか、包括的に整理している。

「我が国農政の目的に応じた直接支払い政策の確立に向けて」という副題がついている。農政を担う行政マンはもちろん、これからの日本農政を考える人にとって、大いに参考になるはず

だ。

共著だが、二人とも先進国で構成するOECD(経済協力開発機構)の農政部門に所属している。莊林氏は元幹部であり、木村氏は現幹部である。世界の農政の潮流から見て、日本の農政がどう見えるか、その位置付けも分かる。

農業保護の手法には、大別すると二つある。関税をかけて農産物の国内価格を高く保つことで国内生産を維持し、消費者負担で農家を支える方法と、関税で保護しない代わりに財政負担で農家を支える方法である。日本や韓国を除くOECD加盟諸国は近年、消費者負担型から財政負担型へかじを切っている。農産物市場開放の代償として、財政で農家を支える「直接支払い」制度を手厚くしてきたからである。

その直接支払い制度には、さまざまな類型がある。関税撤廃で農産物価格が下がり、農家の減った分の所得を補てんするといった「所得安定」を目的とした直接支払いもあれば、農業の「多面的機能」や「環境保全」の発揮を目的とした直接支払いもある。

多様な政策目的を達成するための手段として、直接支払い制度は効果的である。民主党政権で戸別所得補償制度が導入されるなど、わが国の農政でも多用されるようになってきた。透明性の高い政策手段のだが、より公正で効果的なものに仕組むには、政策目的を明確にし、それと整合性のある制度に設計することがポイントになる。

F

読まれています 三省堂書店農林水産省売店(平成26年7月1日~平成26年7月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 平成26年版 食料・農業・農村白書	農林水産省/編	農林統計協会	2,600円
2 平成26年版 森林・林業白書	林野庁/編	全国林業改良普及協会	2,200円
3 農協解体	山下 一仁/著	宝島社	1,200円
4 農業問題 TPP後、農政はこう変わる	本間 正義/著	筑摩書房	780円
5 水産白書 平成26年版	水産庁/編	農林統計協会	2,400円
6 希望の日本農業論	大泉 一貫/著	NHK出版	1,200円
7 農業と経済2014.4臨時増刊号 急変する農業政策		昭和堂	1,619円
8 日本漁業の真実	濱田 武士/著	筑摩書房	840円
9 農業直接支払いの概念と政策設計 我が国農政の目的に応じた直接支払い政策の確立に向けて	莊林 幹太郎、木村 伸吾/著	農林統計協会	2,800円
10 農協の未来 新しい時代の役割と可能性	大泉 一貫/編著	勁草書房	2,400円

農業ビジネスの動向について 大学生に講義

六月二五日、三重大学の学生約八〇人を対象に、日本農業と三重県農業の概要、企業の農業参入や六次産業化など、農業ビジネスの動向について講義を行いました。

津支店では二〇一一年度からコーポレート・ファイナンスをテーマとした講義を受け持っています。年に数回、試験も行われる重要な講義であり、学生はメモを取るなど、熱心に受講していました。学生からは「以前から興味があった農業について学べ、有意義だった」「今回の講義で農業という産業に興味を持った」など、前向きな感想が寄せられました。（津支店）



熱心にメモを取る学生たち

新しい資金調達を 模索するセミナー

六月二六日、大津市にてクラウドファンディング(※)をテーマとしたセミナーを開催しました。

クラウドファン드를多数組成してきた実績のあるミュージックセキユリテイク株式会社西日本支社長杉山氏から、クラウドファンディングの概要および活用事例について、ご講演いただきました。

参加者からは「新たな資金調達方法について知ることができた」「今後の事業展開の参考になりたい」などの感想を多数頂戴しました。※インターネットを利用し、多数の個人から小口で事業資金を募る仕組み

（大津支店）



熱心に聞き入る参加者

農林水産物輸出支援の 勉強会

七月一六日、山形支店三事業会場で勉強会を開催し、生産者、小売業者、関係機関など、二一人が参加されました。

勉強会ではジェトロ山形の長谷川氏から農林水産物輸出の概要について、株式会社インターナショナルの久保氏から貿易商社の輸出取り組みについてご講演いただき、次いで公庫からは農林水産物の輸出支援策について説明をしました。質疑応答では、現地での日本産商品に対する反応や輸出にかかる経費など、具体的な質問がなされ、輸出への関心の高さがうかがえました。（山形支店）



事業者と関係機関との意見交換の様子

日本一幸せな従業員を つくる！交流会を開催

七月一七日、博多にて「フードネットIN九州」を開催し、九州全域の農業・食品産業関連のお客さまや金融機関などを含め、一二〇社のご出席をいただきました。

赤字続きのホテルを再生させた元名古屋タミナルホテル総支配人の柴田秋雄氏からご講演をいただきました。

続く懇親会では、日本公庫が農業者の試験的な輸出をお手伝いする「トライアル輸出支援事業」に参加する貿易商社も交え、参加者同士のマッチングを行い、さまざまな情報交換が活発に行われました。（九州地区統轄）



経営の成果を分かち合う重要性を熱く語る柴田氏

「中国四国ブロック農林水産交流会」を開催

七月二二日、中国四国ブロックの取引先などの方々を対象に交流会を開催し、二四人が参加されました。(株)日本総合研究所の三輪氏より農産物輸出の可能性についてご講演いただき、貿易商社の愛媛エフ・イー・ゼット(株)の玉井氏から公庫とともに取り組む農産物の輸出支援に関し、ご説明いただきました。次いで高知県の(有)池一菜果園の池氏から輸出事例を発表いただきました。

「輸出を身近に感じた」「輸出に取り組んでみたい」などの感想が寄せられ、充実した交流会となりました。(中国四国地区統轄)



農産物輸出の可能性について講演を聞く参加者

「第一九回農業経営アドバイザー研修・試験」を実施

六月二三日から二七日の五日間、東京都府中市において第一九回農業経営アドバイザー研修・試験を実施しました。

本研修・試験には、六月五日に実施した事前試験(農業簿記)に合格した二七六人が全国から参加されました。

農業簿記・農業税務、労務管理、農業・農村構造と農業政策などの研修を受講した後、最終日の二七日に実施した本試験合格者が、さらに八月七日、面接試験に臨み、一日、新たに一八五人の農業経営アドバイザーが誕生しました。(情報企画部)



研修を受講する参加者

「農水産物・食品輸出セミナー」を開催

七月九日から二五日にかけて、愛媛県、鹿児島県、北海道、山形県、兵庫県、愛知県で、農水産物・食品輸出セミナー(お客さまの輸出を後押しするトライアル輸出支援説明会)を開催しました。

ジェットロや貿易商社の講師をお招きし、輸出に関心のある農水産業や食品企業から約一〇〇人が参加されました。セミナー終了後の個別相談会では、多くの参加者から熱心な質問、相談がありました。

参加者からは「具体的な輸出の相談ができて有意義だった」「本格的に輸出に取り組みたい」との感想が寄せられました。(情報企画部)



多勢の参加者で輸出への関心の高さがうかがえる

● 交叉点 ●

タンザニア行政官ら一行が日本公庫来訪

六月一八日、タンザニアから農業省ルボハ・ムギャブソ政策計画局長、農業投資信託基金クンビ・アル総裁をはじめとする訪日団の来訪を受けました。日本公庫からは日本の農業金融や公庫の取り組みについて説明しました。

タンザニアは農業が基幹産業で、日本の農業政策や農業金融手法を学ぼうと真剣に耳を傾けていました。日本公庫の抱える課題や震災復興関連の資金制度について質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。(情報企画部)



ルボハ・ムギャブソ政策計画局長(前列右から3人目)クンビ・アル総裁(前列左から4人目)

「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています!

「技術は経営の基盤」です。日本公庫農林水産事業では、試験研究機関などの研究成果や現場で役立つ実用化技術のポイントをまとめた「技術の窓」をホームページ上(<http://www.jfc.go.jp/n/finance/keiei/technology.html>)で毎月提供しています。また、メール配信サービスでは、これらの更新情報をお知らせしています。ホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。



「技術の窓」のバックナンバーは、ホームページへアクセスし、

1 融資のご案内の「一覧を開く」



2 「経営お役立ち情報」

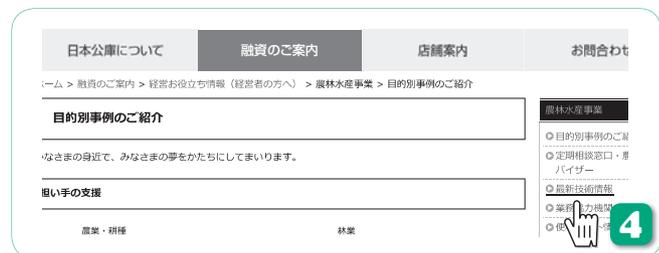


3 「農林水産事業」



4 「最新技術情報」

をクリックして、ご覧ください。



技術の窓バックナンバー

No.1999 チャトゲコナジラミ専用新型防除装置

No.2000 抗酸化物質の補給が初産牛の繁殖成績に及ぼす影響

No.2001 ドリフト低減効果の高い 立木果樹用ドリフト低減型スピードスプレーヤ

No.2002 新規就農者向けの経営管理チェックシート

No.2003 ダイレクト収穫体系による「稲麦ホールクロップサイレジの生産技術」

No.2004 米粉パン特有のテクスチャーを回復率や伸長の測定によって数値化する など

新規就農を希望される方へ

幅広く利用できる無利子の 青年等就農資金をご案内いたします

新たに農業経営を開始される方を支援するための、新しい資金が創設されました。

この資金は、市町村から青年等就農計画の認定を受けた「認定新規就農者」による農業生産のための施設・機械の取得のほか、家畜の購入費・育成費、借地料の一括前払いなどを対象としており、幅広い事業にご利用いただけます。

■青年等就農資金の概要

ご利用いただける方	認定新規就農者 ※市町村から青年等就農計画の認定を受けた個人・法人	
資金の使いみち	青年等就農計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	施設・機械	農業生産用の施設・機械のほか、農産物の処理加工施設や、販売施設も対象となります。
	果樹・家畜等	家畜の購入費、果樹や茶などの新植・改植費のほか、それぞれの育成費も対象となります。
	借地料などの一括支払い	農地の借地料や施設・機械のリース料などの一括前払いなどが対象となります。 ※農地の取得費用は対象となりません。
	その他の経営費	経営開始に伴って必要となる資材費などが対象となります。
ご融資条件	ご返済期間	12年以内(うち据置期間5年以内)
	融資限度額	3,700万円
	利率(年)	無利子(お借入の全期間にわたり無利子です)
	担保・保証人	実質的な無担保・無保証人制度 担保：原則として、融資対象物件のみ 保証人：原則として個人の場合は不要、法人の場合で必要な場合は代表者のみ
ご留意いただきたい事項	1. 国の補助金を財源に含む補助事業(事業負担金を含む)は、本資金の対象となりません。ただし、地方公共団体の単独補助事業や融資残補助事業(経営体育成支援事業)は対象となります。 2. 審査の結果により、ご希望に添えない場合がございます。 3. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件等がございます。詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店(農林水産事業)までお問合せください。	

みんなの広場

♥七月号特集『農地集積、来た道往く道』の観天望氣の一文。「そこには生半可な科学理論では解けない自然の摂理があり、」は、生命維持のための食べ物を生産している私の代弁です。また、「地球上における生命の循環の頂点に立った人間は、地球の万全な管理に責任を負うべき義務がある」。八五歳の私の悲願はこの一言に尽きます。

人間の限らない欲望のために、絶えてゆく小さな命が多過ぎます。昔の有機農業の方が安定した生産ができると感じています。

地球温暖化などで自然が大きく変わり始めました。昭和の前半は人々の生活には今のような底知れぬ不安はありませんでした。今ならまだ間に合う、という焦りがだんだん大きくなってきたように思っています。(宮崎県 徳重 文子)

●本号も八月号に引き続き、二〇一四年度新入職員による本誌への感想を掲載します。

♥六月号特集『地域農業活かす企業参入』の特集「農業参入企業の支援に動く地方自治体」を読んで、私は鳥取県の山間部出身ですので、島根県の農業参入企業の実績のない地域の課題を身近に感じまし

た。既存農家間の閉鎖的な人間関係を切り拓くには、JA、地方自治体、公庫の力が必要です。

私も新規参入した農家を継続的にサポートしていきたいと考えました。(長崎支店 田中 佑果)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上編集させていただきます。ご了承ください。

【郵送およびFAX先】

〒100-0004
東京都千代田区大手町一九四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

編集後記

④ 中学の頃、定食屋でそばの丼をかつこんでいると、画鋏が舌に刺さった。厨房内の掲示からか、頭上のメニューが外れたか。そもそも画鋏がどうやって混入したのか。磁石や両面テープではダメだったのか。今号の編集でそんな昔の事をふと思いついた。店主に告げても、無反応だったことは覚えている。その店は今はもうない。(竹本)

④ 農業の大規模化が進む一方で、「農と食の邂逅」の野村さんのように、小さいけど家族でブルーベリーの栽培に精を出す方がいます。こぼれるような笑顔からは農業が楽しくて仕方ないといった思いが伝わってきます。こういう環境で子育てと農業をしている野村さんの時間は、私が感じる時間よりも何倍もゆったりと過ぎていくのでしょうか。(小形)

④ 山本教授曰く、HACCPによる工程管理の方が、従前の最終製品の抜き取り検査よりもずっと効果的だそう。また、青研の竹谷さんによれば、衛生規範の確立と自主チェック機能を備えた社員は自信を高め、見違えるような成長があったそうです。HACCP導入にはハードルがあると思われる方はぜひ、ご一読ください。(城間)

④ 今号で取り上げた奥会津の三島町(観天望氣)と石川県の春蘭の里(まちづくりむらづくり)が取り組む地域再生に共通している点は、「何も無い」という住民の意識を変えて、地域の魅力を再確認したところ。全国に過疎化の波が押し寄せ、地域の魅力を再確認し、それを生かした町づくりで、活気を取り戻してほしい。(林田)

AFCフォーラム Forum

- 編集
大本 浩一郎 竹本 太郎
藤澤 典子 小形 正枝
飯田 晋平 城間 綾子 林田 せりか
- 編集協力
青木 宏高 牧野 義司
- 発行
(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>
- 印刷
株式会社第一印刷所
- 販売
(一財)農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp>
- 定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。
④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり 農と食 をつなぎます。



第8回 **アグリフード EXPO** 大阪 2015
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月19日^木/20日^金
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



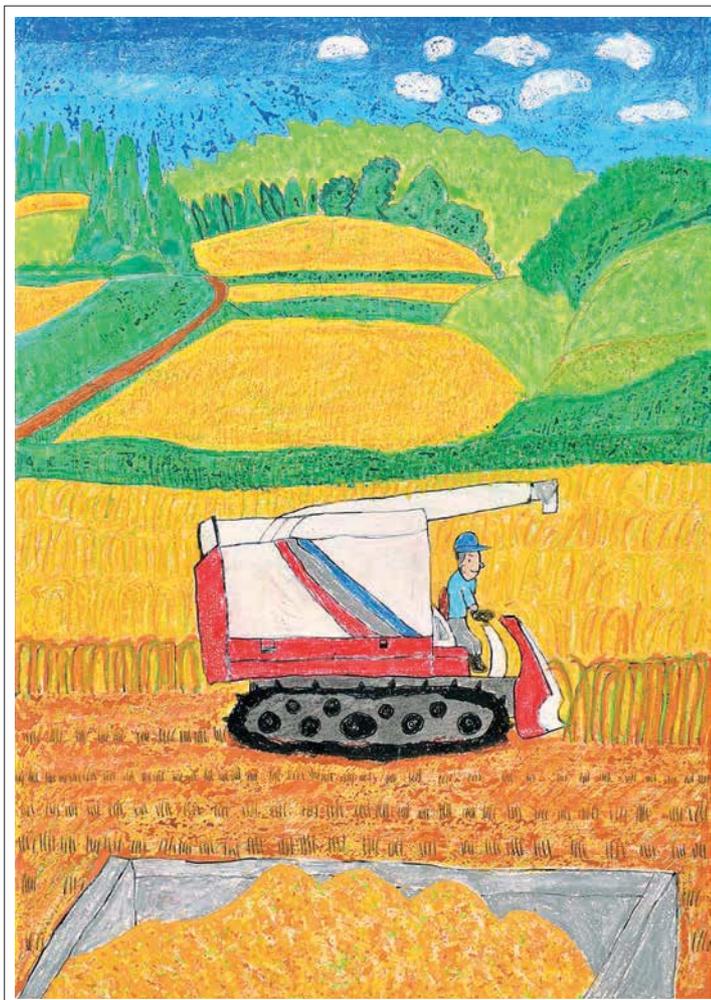
日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



「食」の信頼を取り戻す



『今年もじいちゃん、いねをかる』上遠野 莉那 福島県いわき市立中央台東小学校

■ AFCフォーラム 平成26年9月1日発行(毎月1回1日発行)第62巻6号(769号)
■ 発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■ 販売/一般財団法人農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下田黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■ 定価514円 [本体価格476円]

